The Pacific Society

日本軍占領地における日本語教育

——インドネシア、ビルマの場合——

多仁安代（杏林大学別科日本語研修課程非常勤講師）

一、はじめに

太平洋戦争期初頭、東南アジア地域への進攻作戦を開始した日本軍は、英領香港（一九九四一年一二月）、米領フィリピンのマニラ（四二年一月）、英領シンガポール（同二月）オランダ領ジャワ（同三月）、英領ビルマのラングーン（同三月）を次々に占領し、軍政を施行した。

その中で本稿の主題となるインドネシア地域の軍政は、ジャワ、スマトラが陸軍、セレベス、南ボルネオ、セラム諸島地区（のち小スンダ）は海軍が担当した。

軍政機構の面から見ると、陸軍は南方総軍の下で、ジャワは第一六軍、スマトラは第二五軍、ビルマは第一五軍（のちビルマ方面軍）が管轄、海軍は南西方面海軍民政府の下に、ボルネオ、セレベス、セラムの各民政部をおいた(1)。

三五〇年間に及ぶオランダの植民地支配を受けていたインドネシア地域の住民には、独立の獲得が永年の悲願であった。インドの一州に組み込まれるという立場にあったビルマ人は、住民の精神的なよりどころとなっていた僧侶階級をはじめ、反英気分が強かった。このような背景から、両地域とも進攻してきた日本軍を、初期においては解放軍として受け入れた面があった。

日本軍はオランダによって拘留されていた民族主義者のスカルノやハッタを解放し、イギリスが投獄していたバー・モウやネ・ウインを釈放した。日本軍にとってインドネシア地域は、石油など豊富な天然資源を獲得できること、ビルマはインドからの援蒋ルートを遮断するために重要な地域であった。

一九三七年、中国との全面戦争に突入した日本軍は、中国への経済封鎖を強化するため、米英が軍需品や物資などを補給する輸送路として使っていた援蒋ルートを遮断しようとして、一九四〇年秋、北仏印に、翌四一年夏、南仏印に陸軍兵力を進駐させた。その対抗措置としてアメリカは、四一年八月末、日本への石油輸出を禁止した。アメリカとの戦争を不可避と判断した日本は、四一年一二月八日真珠湾を攻撃し、米英（後にオランダを加えた）に宣戦した。

日本は一九四三年八月、ビルマに独立を与えた。一方、インドネシア人の独立獲得への希望は強かったが、日本軍は資源の利用を主とする戦争協力を求めたとはいえ、当初は彼らに独立を与える予定はなかった。

日本軍はこれらの南方諸地域において、現地人による軍隊を編成している。なかでも、インドネシア、ビルマで創設された軍隊が、日本軍が撤退したあと、復帰してきた旧宗主国との戦いで果たした役割は見逃せない。

あるインドネシア人将校が、「日本人は（オランダ人）に比べて、ずっと大切なことを教えてくれた。それは何もないところから軍隊をつくるには、どうしたらいいかということです(2)」と語り、ビルマ人が「後に日本はビルマ人に対して鬼の本性をあらわしたが、ごく初期に日本から得た価値あるもの、それがこの軍事訓練である(3)」と記したように、日本軍による軍事占領は否定的な面が残されたものの、この地域に施した軍事訓練に関しては評価できると現地人自身が認めている。

これらの軍隊では、日本語教育や日

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

本語での軍事訓練などが実施されていた。本稿は、日本軍によって創設された軍隊が、両地域で果たした役割について、日本語教育や軍事教育を進める過程で育成された成果から観察してみたい。

二、旧宗主国の両植民地支配

オランダによるインドネシア地域へのいわゆる「愚民化政策」の一例を、文教要員として当時バリに滞在した鈴木政平は次のように述べている(4)。

一番顕著なもので、その徹底した無知ぶりをあらわしているものは、彼らの年齢意識であります。だいたい戸籍がないのですから、自分の年齢を知らぬのも無理はありませんが、しかし知識階級でさえもはっきりしないものがあるに至っては、あきれるよりほかはありません。

政治面から見ると、行政機構は総督をはじめ中央政庁の重要ポストは、すべてオランダ人に握られていた。郡、村レベルでは、土着の王侯などが長に就いていたが、それは彼らが従来持っていた権力を剥奪する代償として与えられたものであった(5)。

さらに鈴木は、「彼らはバリ人がジャワ人やその他のインドネシアの多種族と交際することを極度に恐れた。インドネシアにおける諸種族が一つになることを心配したからである。そこで彼らは分割政策を採った(6)」と記し、オランダは多民族国家であるインドネシア人の統一意識を妨げるため、民族を分断する政策を実施したと観察している。

経済構造を見ると、人口の約九〇%が農業に従事していた。この地域の農業は、外国資本によるゴム、コーヒーなどの輸出生産物を中心とする近代的なエステート農業と、米、玉蜀黍のような食料を生産する前近代的な土着農業が併存している点に特徴があった。

エステート農業を独占していたのは、宗主国オランダを中心とする外国資本であった。外国人経営の農園は住民の土地を侵食し、過酷な利潤追求にインドネシア人労働者は、賃金を低く抑えられ搾取されていた。

耕地面積も広く、エステート農業より人口の多かった土着農業従事者は、貴族や村のボスといった封建的支配層に生殺与奪の権を握られ、貧困にあえいでいた。

農業につぐ鉱業も、外国資本に独占されていた。農、鉱業に比べると工業はオランダの抑圧政策によって非常に立ち遅れ、近代的工業はわずかに外国資本による製油、精練業などが見いだされるのみであった。この地域の特産品であるバティック工業と織物業は、規模も小さく大半が華僑資本の下にあった。

インドネシアで吸い上げられた外国企業の利潤のほとんどは、それらの企業が所属する本国へ持ち帰られた。このような構造はインドネシア国内の経済発展を著しく阻害した(7)。

軍事面でも唯一の組織であるKNIL（蘭印軍）は、オランダ人に主導権を握られ、インドネシア人は、ごく限られたポストしか与えられなかった。しかも、KNILはあくまで植民地軍であり、国内の反政府運動を抑え、宗主国による現体制を維持するするための手先機関でしかなかった(8)。

オランダはインドネシアの民族運動に対し、激しい弾圧を加えた。インドネシアの民族運動は比較的穏健なパリンドラと、ゲリンドと呼ばれるオランダとの非協調を唱えるグループに概ね二分されていた。後者に属するスカルノやハッタらは、オランダ当局によって何度も拘禁され、入獄していた。

それにもかかわらず政治的にはオランダ人に、経済的にはオランダ人や華僑に実権を握られていたインドネシア人の独立への希望は、民族主義者ばかりでなく、一般住民の間にも浸透していった。

ひるがえってビルマの例を見ると、三回にわたる英緬戦争の結果、ビルマはイギリスの植民地となるが、第三次英緬戦争（一八八五年）後、イギリスはビルマをインドの一州に組み込んでしまった。この措置は、「かつて栄えた王国が一気に隣国インドの一州に『格下げ』されたことを意味したため、耐えがたい屈辱(9)」となった。

イギリス植民地下のビルマは、政治経済の中心であるラングーンには、植民地行政を担当するイギリス人、経済的な実権を握るインド商人と華僑、それに一部のカレン族などが主に居住し、ビルマ族の人口は三分の一程度に過ぎなかった。なかでもインド人の勢力は強く、都市での経済面ばかりでなく、農村部にまで食い込み、不在地主としてビルマ人の農民を搾取していた(10)。

ビルマもインドネシアと同様に農業が経済の中心となっていたが、北部と南部とでは、状況がやや異なっていた。

北ビルマは、イギリスの資本主義政策の導入によって、従来の土地所有制度が崩れ、土地を失った農民が増加した。また、インド人小作農との確執の上に、米の単一栽培をしている農家が多く、米価の高低に収入が左右され、経済的に安定しなかった。それに比し、南ビルマは多種の作物を栽培していたことから、自然災害による影響を受ける面が少なかった。

工業労働者の人口は少なかったが、

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

そのほとんどが外国資本の工場に雇用され、劣悪な待遇とともに、インド人労働者との競争にもさらされていた。

仏教徒が人口の九〇%を占める仏教国のビルマでは、僧侶は住民の精神的なよりどころとなり、社会的な権力をも有していた。僧侶は直接政治には関与しなかったが、政治運動を支える存在となり、「これには流石の英国も余程手を焼いていた(11)」という。

この時期のビルマの民族運動を推進していたのは、タキン党と呼ばれる民族団体であった。正式名称は「ド・バマー・アスィーアヨウン」といい、各人が名前の前にビルマ語で「主人」を意味する「タキン」を冠したことから、一般にタキン党と呼ばれていた。このタキン党には、日本軍撤退後のビルマ独立に貢献するオン・サンや、戦後首相となるウ・ヌー、ネ・ウインなど、ビルマの政治中枢を占める人物が含まれていた。

イギリスは統治方針として意図的に小数民族でキリスト教徒のカレン人を重用し、民族分断をはかっていた。ビルマは多民族国家といっても、ビルマ族と仏教徒が人口の大半を占めており、他の南方地域に比し、民族的、宗教的統一性が高かった。したがって、このようなビルマ人に武器を持たせることをイギリスは警戒し、軍隊にインド人は採用したが、ビルマ人はすべて閉め出していた(12)。

武器を持たせられず、経済的実権をイギリス人、インド人、華僑に握られていたビルマ人は「統一された宗教の下に纏まった思想と、印度よりも高い文化とを持つ彼等は、いつの日にかはと独立の機会を狙っていた(13)」のであった。

次に両地域の文教政策を概観すると、オランダは領有初期にはインドネシア人にオランダ語を教えるより、オランダ人官吏に現地語を学ばせる方策を採っていた。一九世紀末になって五年制の貴族や富裕な階層の子弟を収容する第一級学校と、民衆のための第二級学校を設立した。また、地方に在住する庶民のための初等教育機関として国民学校（村落学校）を創設している。

第一級学校では一九一一年になると、低いレベルとはいえ、オランダ語が教授用語となった(14)。しかし、中等学校へ進むために必要なオランダ語はヨーロッパ人学校に比べると劣っており、一部の富裕なインドネシア人しか高等教育を受ける機会はなかった。

オランダは現地人に対する教育を軽視し、卒業証書に税金をかけたり、学用品の使用量を規制するなどの措置を講じていた。また、教育施設である運動場は狭い上に、教室は出入り口のみで窓がないため暗く、一見牢獄のようだとの観察もある。

またオランダは、インドネシア人が「反乱」する勢力になった時のことを恐れ、体操のような体力を向上させる科目は採り入れなかったともいわれる。そのためか、児童に体操を教えてみると、頭だけを前後に曲げることがどうしても出来ないものがあって、いくら何といっても身体ごと付いていく、という光景も生じたという。

オランダ植民地下のインドネシア人の識字率は、一九三〇年の国勢調査によれば、わずか四%に過ぎなかった(15)。オランダはインドネシアにおいて、統一言語を普及させる政策を採らなかった。これは、明確な言語政策がなかったというより、民族統一意識が生じないように意図的に行われていたとの見方がある(16)。

ビルマにおける初等教育機関は四年制の小学校で、英語教授の有無により、英語学校、英語土語併用学校、土語（ビルマ語）学校に分かれていた。英語学校と英語土語併用学校は、官立または私立で土語学校に比べ校舎も広く、教員も優秀な者が多かったが、授業料が高かった。土語学校が一般ビルマ人向けで、約六七〇〇校を数えた。地方教育関係当局が管轄しており、イギリスはこれらの学校に対し、特別な指導や援助を与えなかった。

英語学校と英語土語併用学校は、イギリスに同化した少数のビルマ人指導層を養成するのが狙いだったようである。また、イギリスはビルマを原料供給地にとどめるため、ビルマ人に対しては、手工業程度の教育に抑え、とくに技術教育が必要な場合は、英本国に留学させ教育していた(17)。カレン族に対してはキリスト教を布教し、それに基づく教育を実施していた。

仏教国のビルマでは、男子は七、八歳になると仏門に入ることが義務的慣行になっており、村落寺院で最低三カ月、お経のほかに読書、習字、算数などを習った。「時には仏教上の習慣に背いて女子の入学を許すこと」もあったので、義務教育未施行の地域としては珍しく、人口の四〇%と識字率が高かった。

日本軍の占領前からビルマに潜入し、工作活動を開始していた国分正三（予備役海軍士官）は、ビルマ人の教育レベルを次のように観察している(18)。

彼等は書いたものによって世界の動きということをよく知っている。これは驚く程よく知っている。田舎の農家へ行きましても事、独立に関することなら極めて熱心に聴もするし書いた物も見るのでありますから、国内事情世界の大勢ということは割合よく知っているのであります。

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

ビルマ人の識字率の高さや、独立や世界情勢に対する関心の強さが窺われる。

三、ペタとBIAの誕生

一九四二年三月ジャワを占領した第一六軍は軍政の遂行には民族主義者の協力が不可欠であると考え、オランダによって拘留されていたスカルノやハッタを解放し、登用した。スカルノの方は、「民主主義と軍国主義のどちらを選ぶかと尋ねられれば民主主義を選ぶ。しかし、もしオランダ民主主義を選ぶか日本軍国主義を選ぶかと問われれば、日本軍国主義を選ぶ(19)」と述べたという。

日本軍はこの地域に当面独立を与える予定はなかったが、戦局の悪化にともない、人心の掌握を重視した日本政府と現地軍は、参政権の拡大など、近い将来における独立付与を前提とした準備措置を次々に進めざるをえなくなる。防衛義勇軍（ペタ）の編成もその対策の一環であった。

第一六軍参謀部は、柳川宗成を主務者とする別班に、その業務を担任させた。柳川は一九四三年一月、別班の任務を補佐するインドネシア人の要員養成を目的とするタンゲラン青年道場を発足させた。指導には陸軍中野学校出身者で別班の将校が当たった。

第一期要員の五〇名は、ジャワ各地から厳選された青年達であったが、行き先や目的、教育の内容などは、一切知らされていなかった。このタンゲラン青年道場出身者が、その後、日本軍によって編成される防衛義勇軍の核となった。

第一六軍は、防衛義勇軍編成をインドネシア人側からの発意であるという建前を採りたかったため、別班の通訳である富樫武臣の友人で、かつてスカルノと共に国民党を組織し、副党首の地位にあったガトット・マンクプラジャから「建白書」を提出させるという形式にした(20)。

一九四三年一〇月、原田熊吉軍司令官の名で治政令第四四号が発出され、「ジャワ防衛義勇軍」（ペタ）の編成が決定した。布告の第四条に、「ジャワ防衛義勇軍は郷土防衛精神に徹し米英蘭に対し各州防衛に任ず(21)」とある。あくまで防衛するのは「郷土」であり、独立を誘発するような「祖国」という言葉は避けられた。

郷土を防衛するという認識を持たせるため、ペタにはKNIL出身者は採用しない方針であった。「独立」を目標に掲げれば教育の成果をあげることは容易であったが、当面それができないため、オランダに抑圧されたインドネシアの歴史などを教えて、将来独立した際に軍の幹部となるべき自覚を促し、厳しい訓練に耐えさせた。

採用された将校の階層を見ると、ペタ将校の方がKNIL将校より、やや低い層の出身者が多かった。彼らは、衣食住を保障され、給料も支給された。これは、「サロン一枚を家族で共有する(22)」というインドネシアの貧困状況下では悪くない待遇だった。義勇兵の募集に際して、定員をはるかに超える応募者が殺到した背景には、このような社会事情があったのである。

インドネシアでは、すでに防衛義勇軍を編成する約半年前から、兵補と呼ばれる日本軍の補助兵力として採用されたインドネシア青年がいた。兵補には州、市、侯地の長官から推薦を受けた一六歳から二五歳までの独身青年に、二カ月間の軍事訓練を受けさせた。資格の中に、日本語学校などで平均半年以上の教育を受けていることが条件となっており、日本語の使用の可否が採用条件の一つのポイントであったと言えよう。

敗戦後、撤退する第一六軍は兵器をインドネシア側に渡した。宮元静雄によれば、その数は小銃類だけで約四万梃に上るという(23)。すでに義勇軍、兵補をはじめ青年団、隣組のメンバーなど、渡された兵器を使用できるようになったインドネシア人が、日本軍によって育てられていた。

イギリスに投獄され、日本軍によって釈放された後に首相に据えられるバー・モウは自伝で次のように書いている(24)。

私は戦争はまだまだ続き、終戦になる前に必ず日本軍がビルマに入ってくるだろうと突然考えた。その場合日本にとってビルマや他のアジアの国々で反英暴動が起き、反乱になることは大きな利益に違いない。われわれの革命はそういう形で達成されるだろう。私はすぐこうした理解をもって日本人とことを進めることにした。

バー・モウは戦争の混乱が、独立を獲得する好機と受け止めていたようだ。

ビルマに対する諜報活動は、はじめ海軍の予備役大尉で、一九二三年頃、歯科医としてビルマに渡った国分正三によって進められていた。援蒋ルートを遮断する必要から、ビルマの重要性を感じた陸軍も、陸軍大佐の鈴木敬司を送り込んだ。鈴木は一九四〇年、日緬協会書記長の南益世なる偽名でビルマに入った。

鈴木と国分の個人的確執もあったとはいえ、四一年二月に陸海軍共同で、ビルマ工作を目的とした大本営直属の「南機関」が設置された。機関長は鈴木敬司で、表面上の名称を「南方企業調査会」と称した。

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

その頃アウン・サンは同志と共に中国共産党と接触するため、中国のアモイに渡っていた。それを知った鈴木は、二人を保護して東京へ送るように指示し、日本へ戻ってアウン・サンたちを迎えた。鈴木はアウン・サンに日本軍による独立支援を提案する。中国での日本軍の侵略行為を知っていたアウン・サンは、はじめ躊躇したが、結局日本軍とともに当面の敵であるイギリスと戦うのが、独立を得る近道と判断し、この提案を受け入れた。

イギリス時代にビルマ人は軍隊から排除されていたため、軍事経験のなかったタキン党員たちは、反英闘争を進めるには、ビルマ人自身の軍隊が必要であると痛感していた。一方「南機関」は、ビルマの青年たちを日本に送り、軍事訓練を施した後、ビルマに帰して反英闘争を展開させる方針であった。参謀本部も「日本軍がビルマに征かないで、ビルマ人がたちあがってくれたらそれにこしたことはない(25)」と考えていたようだ。

一九四一年二月、アウン・サンの他四名の日本式に変名したビルマ青年たちが日本へ向けて出発した。引き続き三回に分けて脱出が実行され、計三〇名が来日した。この「三十人志士」と呼ばれる青年たちは、後に「ビルマ独立義勇軍」（BIA）というビルマで初の近代的な軍隊を結成する中心メンバーとなったのである。彼らは最初は内地で、ついで海南島で、連日厳しい訓練を受けた。

ところが、「三十人志士」がビルマに帰るころになると、戦況が変化していた。すでに日本軍は米英に宣戦を布告し、援蒋ルートの遮断という間接的手法を採る必要はなくなったため、彼らの処遇が問題となった。鈴木は彼らを中心に「ビルマ独立義勇軍」を結成することとし、四一年一二月入隊式を挙行した。

ビルマへの早期独立付与を主張する鈴木は、しだいに軍の中央から疎まれるようになり、四二年七月に内地へ転属、その他の機関員たちも軍政の主流からはずされた。

第一五軍は独立の約束が守られないことで、「独立義勇軍」の不満が高まるのを危険と感じた。その不満を回避する策として「独立義勇軍」を解散させ、アウン・サンを軍司令官として四二年七月「ビルマ防衛軍」（BDA）に編成替えすることとした。九月にはビルマ防衛軍士官学校が、ラングーン郊外のミンガラドンに開設された。

その後、中央の政策転換で四三年八月ビルマが独立したさい、「ビルマ防衛軍」は「ビルマ国軍」と改称された。日本軍による独立付与も、戦局の悪化で必ずしもビルマ人の民心を集めることはできず、ビルマ軍部の反日傾向は「ビルマ国軍」に改編されてから、むしろ強まったといわれる(26)。

一九四四年、日本軍はインパール作戦に敗北し、勝利への見通しは、ほとんど消え去った。アウン・サンたちのタキン党員たちは、こうした情勢を背景にひそかに反日運動を開始した。バー・モウは運動には参加しなかったが、知り得た情報を握りつぶし、日本側に知らせないようにしていた。

四五年三月二七日、アウン・サンの指揮下に「ビルマ国軍」は「人民独立軍」と改名し、一斉に抗日反乱を開始した。攻撃の的は主に憲兵、商社員などに向かった。日本人軍事顧問も約二〇名が殺害されたが、多くは逃亡を黙認され、とくに「南機関員」たちは丁重に扱われた。

四五年六月には、連合軍のビルマ反攻に抗しきれず、南部の一部を除き、日本軍はビルマから撤退した。入れ替わりに旧宗主国のイギリスとインド人大地主が戻ってきた。しかし、名目とはいえ、一旦独立を味わったビルマ人は、植民地支配の復活を許さないだけの意識と軍事力とを備えていた。

四、日本語教育と軍事訓練

軍事訓練を受けるために日本へ渡ったビルマの「三十人志士」たちと日本人将校との意志の疎通にはブロークン・イングリッシュが使われた。それでも訓練生たちは、日本へ向かう船上で、日本語を「毎日少なくとも一〇から二〇の単語を習い」という生活を送った。訓練生の一人ボー・ターヤーは、この時の感想を次のように記している(27)。

> 正直に告白すると、私は以前は日本人の教育水準を西洋諸国の水準とくらべてみてかなり低くみていた。何の罪もない中国しか攻めることができないのだと思いこんでいた。ところが日本に行って日本製の武器を実際に使用してみてはじめて日本人の能力に感嘆し、まねをする気になった。

日本で軍事訓練をうけるうちに、日本に対する見方が変化していったようだ。

ビルマでは他の南方占領地と異なり、既存の学校で日本語を必修科目とせず、別に日本語学校を設立して日本語教育が実施された。この策はバー・モウの意向を尊重した第一五軍司令官飯田祥二郎中将の方針であった。しかし日本語教育問題で、すべてバー・モウの意向が通ったわけではなかった。バー・モウは自伝で、次のように記している(28)。

日本の軍国主義者たちは、この

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

敗北でそのまま引き下がりはしなかった。彼らはただちにオン・サン（アウン・サン）を味方につけ、彼を通じて私の反対から学校で出来なかったことをビルマ軍で実施することに成功した。しばらくして私は日本語がビルマ軍の実用語となり、義務的に教えられていることを知った。

彼は、日本語が軍隊で教育されることについても反対であったとしている。ところが、この時点でのビルマの現実は、軍の指導は日本人に頼るしかなかった。続いてバー・モウは(29)

ビルマ軍について言えば、それが日本人とより強く結びついていたから、さらに一歩進めて軍事訓練と通信に日本語を使用することに同意したのである。私はオン・サン（アウン・サン）にどならんばかりに問いただした。「私が学校や官庁での日本語使用をきっぱりと断わった後に、またなぜあのようなことを許したのか？」彼の躊躇する様子を見て、私は彼がその予想される結果を考慮し、自分も好まないのだと考えた。

しかし、それを告白するかわりに、彼は「どうせ日本軍がわれわれの軍隊をこれから長く教練するのだしそんな大した違いがあるとは思わない。そのためには彼ら自身の言葉の方がむしろよい」といった。これらの意見が当時のビルマ国民の大方の意識を代弁していた。

として、軍隊での日本語教育や日本語による教育が、現実的な策と認めざるを得なかったと述べている。アウン・サン自身は、流暢な日本語を話すことができたという。

ビルマ防衛軍では、日本の歩兵操典にのっとって訓練が行われた。幹部は日本の予科士官学校に入り、兵卒にいたるまで日本語で教育され、軍人勅諭や戦陣訓も暗唱させられた(30)。

ミンガラドンの陸軍士官学校は、士官、幼年、下士官学校を兼ねていた。士官候補生は大学卒業程度の者を一年、下士官候補生は試験に通った者を六カ月、幼年学校は三年間の教育期間が設けられていた。軍用語の日本語教科書も作られ、とくに幼年学校の教育は、すべて日本語で行われた。士官学校で教えた羽田栄太は、日本語教育の様子を次のように記している(31)。

ここでは、文型などは問題ではなかった。「これは何だ」「小銃です」「かわやへいってよいでありますか」「めんせんきはどこにありますか」といった調子の、日本軍隊用語をつめこんで、一日も早く日本軍との連けい活動のできることに主目的があった。一番困難を極めたのは、操典の暗記であった。歩哨の守則などは、日本軍そのまま不寝番の守則までも、日本軍隊式であった。

一日、私は野田少佐と碁を打ちながら、何とかやさしい日本語でいけまいかと話した。少佐は言下に「だめだ」といった。日本軍全体の用語が平常語になるならだけれど、そんなことは「今の間に合わないのだ」と。

士官学校では、他の日本語学校とは異なり、即戦力となるような日本語教育が要求されていた。

実際の兵器の使い方は、教育隊という組織の軍人が指導した。教育隊に配属された朝日向光一は(32)

そこへ行ってはじめてビルマ人を教育するということがわかった。言われたことは、すべて日本語で教育しろということだった。英語といっても私はアルファベットくらいしかわかんないからね。幹部候補生一三名の班長になって、訓練を始めたんだ。とにかく言葉はわかんないから、動作で示す以外にない。気をつけ！敬礼！・・・何でも声をだしては動作してやる。そうやって覚えさせた。三カ月ぐらいたったら大体、動作もそろってきた。

と述べ、すべて日本語で教える直接法を想起させるような方法で訓練したと回想している。士官学校のほかに「少年訓練所」という組織が開設された。一九四三年三月三〇日付の『ビルマ新聞』に次のような記事がある。

ビルマの幼年学校ともいうべき少年訓練所がいよいよ開所する。ビルマの少年を訓練して立派な将校に育てあげようとラングーンに設立された少年訓練所（聖風寮）では四月三日開所式を挙行。未来の将校達に日本語、歴史、数学、理科の四課目を教え、さらに教練、体操、武道などを課し日本式の軍事教育を行うこととなった。この開所式を前に去る二七日から入所志願者の身体検査が始った。受験者のうちには遠く上ビルマから押しかけたものもあり採用人員に比し圧倒的な応募者数を示している。受験の少年は勿論付添の親達まで「是非合格させて下さい」と係官に嘆願するなど起上ろうとするビルマ人の心意気を見せていた。身体検査は二八日も続行され二九日

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

は学科試験が行なわれる。

ビルマ人の独立意識の高さや、軍事力の必要性は年齢の低い層にも浸透していたと思われる。

ミンガラドン士官学校の候補生たちは、一〇日後の日本軍への反乱を知らされていたのであろうか、四五年三月一七日に英軍との戦闘を予定した「ビルマ国軍」の出陣式に参加して兵舎に帰ったあと、日本語を教えていた教師も気づかないうちに、未明には二、三人の下士官を残しただけで遁走してしまったのである。

ここで、視点をインドネシアに移すと、ジャワ防衛義勇軍の前身であるタンゲラン青年道場では、精神教育、軍事学、特殊教育の諜報、宣伝などの学科とともに、語学として日本語が教えられた。ジャワ防衛義勇軍の軍事訓練については、すべて日本語で実施する方針の部隊、号令のみ日本語で、その他は通訳を介する部隊、すべて現地語による部隊など様々であった。

日本語教育の時間数やレベルもまたそれぞれ異なっていた。すでに軍政監部が設置した日本語学校で学んだものが各部隊に数人はいたという。

義勇軍に対する日本語授業を参観した藤田静雄少尉は、その時の様子を次のように述べている(33)。

私は第一回の義勇兵に対する日本語授業をのぞいて驚いた。日本語の割に上手な小団長(34)が熱心に教えていた。兵は、ザラ紙を持ち三人に一本位鉛筆を持っているが何も書いていない。やって来た中団長に室の外で尋ねると「義勇兵は皆字を知りません。学校へ行ってませんから書けないのです。村や家庭ではジャワ語ですがそれも書く、ということはあまり致しません」

これは大変だ、まずマレー語の勉強が先だと思い、広瀬先任指導官と相談して、日本語の学習は一年間延長し、その間マレー語の読み書きを指導することにした。

義勇兵でもわずか二〇%という識字率では、日本語教育よりも母語の教育を優先せざるを得ない状況であった。通訳で初歩の日本語を教えた中島正周によれば、手旗信号を応用してカタカナを教えたり、実際に動作を見せて動詞の使い方を分からせたりしたという(35)。

ボゴールでは難解な軍用語を平易な日本語に言い換えて教育していた部隊もあった。例えば堅固をツョイ（ツョイ陣地）、構築をツクル（工事ヲスル）、渡渉（河ヲ渡ル）、到着をツイタ（目的地ニ）のように口語体にするとともに、使い方についても例を示した。

治安維持のために、警察の補助的な役割を果たしていた警防団でも、軍事訓練の他に地域によっては日本語教育も行われた。警防団で使われた専門用語の多くは日本語であったため、日本語の修得は不可欠であった。

日本軍がフィリピン戦で神風特別攻撃隊を出撃させた一九四四年一〇月二五日の約一ヵ月後から『ジャワ新聞』に、自爆攻撃隊への志願の記事が数多く見られる。個人ばかりでなく、集団で、夫婦で、また女性の希望者も続出した。いくつかの回教団体も「自爆隊」を結成した。

なかには単独で日本人の州長官に直接志願を希望する女性まで出現し、それには長官が「日本の戦力は女兵士まで第一線に送り出さねばならない敵米英とは異なる」といさめて帰すなど、軍政当局も困惑気味のようである。とくに、アマット兵補がボルネオのタラカン島で、日本人兵士とともに敵機銃陣地に突入、自爆したと伝えられると、その熱気は一層強まった。

四四年一二月二九日付の『ビルマ新聞』に軍事訓練を受けている青年が、習得した日本語で次のように綴った記事が掲載されている。

捨て身の覚悟　少年航空兵
イエトン

私は日本の軍人は偉いといつも思っていましたが、レイテ島の神風特別攻撃隊の働きを聞いて特に強く感じました－中略－私もビルマのため人間爆弾となって米英をやっつけます必勝の信念と国に命を捧げる覚悟でビルマ反撃を叫んでいる敵を追い散らして〝もう駄目だ〟と思わせます。

この命国へ捧げん　少年航空兵
モン・サン・ミイン

私たちはビルマ陸軍士官学校で少年航空兵として毎日体操と日本語と教練を一生懸命に勉強しています、日本軍の教官殿も軍人精神と攻撃精神をとくに力を入れて教えて下さっています－中略－私は〝あと四年のうちに死ぬ〟と決めています、攻撃の命令が出れば真っ先に飛んで行き敵軍や兵器庫を攻撃します、若し敵弾があたって飛ぶことが出来ないようになれば敵軍の中へ自爆します、私は今から私の全体をビルマ国に捧げております。

このように、ビルマでも日本軍の特別攻撃隊に刺激され、軍事訓練を受け

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

ていた青年たちの間に、国土防衛のためには、自爆的攻撃法をも辞さない気分が育成されていたのである。

五、むすび

インドネシアの防衛義勇軍、ビルマの防衛軍の創設は、ともに日本軍の独立付与延期に対する彼らの不満を回避するため編み出された策であった。しかし、日本軍による軍事訓練を経験するうちに、彼らは次第に意識を高めていった。日本軍の撤退後に復帰してくるであろう旧宗主国による再植民地化を阻止するために必要だという切実な意識であった。

日本語による訓練を現実的な方策と考えた現地軍にとって、日本語教育の強化は不可欠な施策であった。内容は、軍事訓練を施すために必要な事項が優先され、速成主義に偏りがちであったと言える。しかし縁の下の力持ち的な存在とは言え、両軍で実施された日本語教育が、実践力と精神力を養成する上で果たした役割は小さくない。

自爆攻撃隊への参加希望もその副産物と言えよう。爆雷を抱えて敵戦車に突入するという自爆隊の手法は、日本軍の敗戦後、復帰してきた旧宗主国（オランダ）との独立戦争で生かされたという。

日本軍による占領について、バー・モウは「歴史的に眺めてみると、日本ほどアジアを白人の支配下から解放するのに尽くした国は、他にどこにもない。にも拘わらず解放を援助しまたは、いろいろの事柄の手本を示したその人から、これほどまでに誤解されている国もまたない(36)」と総括している。

ジョージ・S・カナヘレは、インドネシア地域での日本軍による「日本化」（いわゆる皇民化）は、学校や新聞、ラジオを通して行われたのであるが、それはせいぜい表向きの努力目標程度であって「戦後いろいろ言われたところと違っている」と書いた。そして、「日本化」が浸透したと思われる点を挙げるとすれば、母国を防衛するための犠牲精神、青年層の民族意識を覚醒させたことであると分析した(37)。

その結果、日本軍による占領期間中に、植民地の住民の「民族主義、独立要求はもはや引き返せないところまで進んでしまったということをイギリス、オランダは戦後になって思い知る(38)」ことになるのである。

註

(1)軍政組織については、秦郁彦編『南方軍政の機構・幹部軍政官一覧』（非売品、一九九八年）二五－四一頁を参照。

(2)ジョイス・C・レブラ、村田克己訳『東南アジアの解放と日本の遺産』（秀英書房、一九八一年）二四一頁。

(3)キン　スゥエウー、田辺寿夫訳『わが祖国』（勁草書房、一九八二年）三六頁。

(4)鈴木政平『日本占領下バリ島からの報告－東南アジアでの教育政策』（草思社、一九九九年）三九頁。

(5)谷川栄彦「太平洋戦争中のインドネシア民族運動－ジャワを中心として」（『法制研究』二一巻一号、一九五三年）一〇八頁－一一〇頁。

(6)前掲、鈴木『日本占領下バリ島からの報告－東南アジアでの教育政策』一一七頁。

(7)末永晃『インドネシアの歴史』（鳳出版、一九八〇年）二三七－二三九頁。

(8)白石愛子「ジャワ防衛義勇軍の設立」（『東南アジア－歴史と文化－』四号、平凡社、一九七四年）六頁。

(9)根本敬『アウン・サン－封印された独立ビルマの夢』（岩波書店、一九九六年）二七頁。

(10)文部省調査部『南方圏の教育』（一九四二年）二九九頁。

(11)熊谷国造・浅見宣三『黎明ビルマ』（童話春秋社、一九四三年）七〇頁。

(12)大野徹「ビルマ国軍史（その1）」（『東南アジア研究』八巻二号、一九七〇年）二二九頁。

(13)前掲、熊谷など『黎明ビルマ』七〇頁。

(14)戸田金一「インドネシア教育史」（梅根悟編『東南アジア教育史』講談社、一九七八年）六九－七四頁。

(15)佐藤弘『南方共栄圏の全貌』（旺文社、一九四二年）八一六頁。

(16)木村栄一郎「軍政期の教育制度と日本語教育」（早大社会科学研究所編『インドネシア』一九七九年）三一八頁。

(17)軍事極秘森第七九〇〇部隊『緬甸軍政史』（一九四三年九月）一一七頁。

(18)国分正三「ビルマ独立運動に就いて」（『大阪南方院パンフレット』第七輯、一九四三年）八頁。

(19)後藤乾一『近代日本と東南アジア』（岩波書店、一九九五年）二五六頁。

(20)森本武志『ジャワ防衛義勇軍史』（龍渓書舎、一九九二年）七二頁。

(21)ジャワ新聞社『ジャワ年鑑』（一九四四年、復刻版、一九七三年、ビブリオ）五一頁。

(22)三好俊吉郎「ジャワ占領軍政回顧録（第六回）」（『国際問題』六七号、一九六五年）七一頁。

(23)宮元静雄「ジャワ第一六軍とインドネシアの独立」（『丸』別冊太平洋戦争証言シリーズ3、一九八六年）四三七頁。

(24)バー・モウ『ビルマの夜明け』（太陽出版、一九七三年）九三－九四頁。

(25)森山康平・栗崎ゆたか『証言大東亜共栄圏－ビルマ・インドへの道』

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

（新人物往来社、一九七六年）二六頁。

(26) 大野徹「ビルマ国軍史（その2）」（『東南アジア研究』八巻三号、一九七〇年）三六一頁。

(27) ボー・ミンガウン『アウンサン将軍と三十人志士（2）』（『鹿児島大学史録』第四号、一九七一年）一一七頁。

(28) 前掲、バー・モウ『ビルマの夜明け』三一二頁。

(29) 同右、二九五頁。

(30) 田中正明「ビルマ独立軍の悲劇—悪夢の記録大東亜戦争の真実を語る—」（『日本週報』ダイジェスト版、一九五六年）九六頁。

(31) 羽田栄太「ビルマ陸軍士官学校」（『せくぱん—ビルマ日本語学校の記録』（修道社、一九七〇年）二五四頁。

(32) 前掲、森山など『証言記録大東亜共栄圏—ビルマ・インドへの道』一〇五頁。

(33) 前掲、森本『ジャワ防衛義勇軍史』三四一頁。

(34) ジャワ防衛義勇軍は小団を底辺に中団、大団のピラミッド型で構成されていた。大団長は三五歳以上、中団長は二五歳—三五歳、小団長は一六—二五歳位を基準としていた。

(35) インタビューによる。一九九八年三月一四日（ひたちなか市の同氏宅で）。

(36) 前掲、バー・モウ『ビルマの夜明け』二〇〇頁。

(37) カナヘレ『日本軍政とインドネシア』（鳳出版、一九七七年）一二七頁。

(38) 前掲、レブラ『東南アジアの解放と日本の遺産』二五六頁。

PACIFIC ISLAND BOOKS

THE BOOK BIN buys and sells out-of-print and hard-to-find books on Micronesia, Polynesia, Melanesia, New Guinea, Australia and New Zealand. Write for our catalogue of books on all aspects of Pacific life, including history, ethnography, fiction, folklore, archaeology, early voyages and contemporary adventure.

Robert S. Baird
The Book Bin - Pacifica
228 S.W. Third
Corvallis, OR 97333
(541) 752-0045
FAX (541) 754-4115 or (541) 752-0045
E-Mail: Pacific@bookbin.com

NII-Electronic Library Service